

## 要旨

本研究は、岐阜県揖斐川郡揖斐川町谷汲華厳寺の緑ヶ池南東部において、標識再捕獲法を用いてモリアオガエルの移動を調査した。オス成体に関しては個体レベルの識別を施し、繁殖期・非繁殖期の移動を把握した。また、幼体に関しては日ごとに個体群を識別することで日移動を把握した。

オス成体は、繁殖期には産卵場である池周辺から 3 m 範囲の場所から移動しない傾向がみられ、非繁殖期には、池に連続する林内へ移動した。林内で確認できる期間は年によって異なり、これは繁殖期間中の気温上昇に関係しており、気温上昇が急であるほど移動する期間が集中する傾向が見られた。林内で確認した個体の一部は繁殖期に池周辺で確認した個体であり、その移動範囲は最長斜距離が 83 m であった。また、林内において確認した個体のうち約 7 割を高さ 2 m 以上の樹上で確認し、調査中に頭上から落下してくる個体も確認したことから、オス成体は樹木の枝葉を伝って移動しているといえる。

幼体は変態後 2 週間程度池周辺に留まり、林内においては多くが沢沿いに分布したことから、水環境に依存しているといえる。また、林内では 1 日で斜距離 35 m 移動する個体を確認し、高さ 2 m 以下の植物体葉面上で多くの個体を確認した。

以上から、本種オス成体は繁殖期において池周辺から大きな移動を行わず、非繁殖期の林内への移動時期はその年の気温変化の影響を受けることがわかった。林内では 2 m 以上の樹木の枝葉を移動することから、枝葉の接するような樹木密度の森林が、産卵池から最低でも 83 m の範囲で必要である。また、幼体の移動には生存に必要な水環境と、幼体が選択的に利用する 2 m 以下の低木あるいは下草の豊富な林床が必要である。そのため、産卵池と森林とは緩やかに連続し、林内の低木は幼体が 1 日に移動可能な 35 m 範囲に点在する程度の密度が望ましいことが明らかになった。